

学会ニュース

目次

・ 第27回大会について	1
・ 2004年度国際18世紀学会執行委員会報告書 増田 真	2
・ 再発見されたバッハのカンタータ楽譜 礒山 雅	5
・ 事務局より	8

第27回大会について

来年度の大会は、2005年6月11日（土）、12日（日）に、日本大学文理学部（東京都世田谷区）で開かれることが決定いたしました。開催校責任者は、佐々木健一代表幹事です。詳細は5月半ばにお届けする予定の大会プログラムでご案内申し上げます。

共通論題：「近代都市の胎動」（コーディネーターおよび司会は佐々木健一会員、原則として6月12日を当てる予定です）

西洋や中国に見られる都市空間は、日本の文化にとって異質なものを含んでいます。それは、「自然」に対立する「文明」の空間で、日本の都市にはこの排他的な閉鎖性がありません。18世紀は、西洋において、このような伝統的な都市が近代都市へと変貌してゆくプロセスの始まりの時期にあたります。日本においても、独特の都市文化が開花する時代です。また、西欧諸国による他の地域の植民地化の運動は、新しい都市の建設を伴うものでした。これらの諸形態を学びたいと思います。

自由論題公募（原則として6月11日を当てる予定です）

第27回大会で発表を希望される方は、1000字以内の発表要旨（なるべくテキストファイル形式あるいは「ワード」ないし「一太郎」形式のフロッピーディスクとハードコピーの両方）を付けて、3月18日（金）までに学会事務局までお申し込み下さい（メールでも結構です）。発表者の持ち時間は1時間、うち報告が40分、質疑が20分を予定しておりますが、申込者が多数の場合には、持ち時間を短縮したり、あるいはこれまでの発表の有無、共通論題を含む諸分野間のバランスなどを勘案して、常任幹事会で調整ないし選考させていただきますので、その点、あらかじめご了承下さいますようお願い申し上げます。また、会場で配布されるコピー資料は原則としてご自分でご用意いただくことになっております。詳細はプログラムが決定次第、事務局から個々に連絡申し上げます。

2004年度
国際18世紀学会執行委員会報告書

国際18世紀学会の2004年度執行委員会は、9月24日にポルトガルのリスボンで開催され、日本からは国際幹事の寺田と国際学会執行委員の増田が参加した。シンポジウムの会場は国会議事堂に面したマリオ・シュアレス会館で、執行委員会の会場はポルトガル18世紀学会の本部であった。

I. シンポジウム

通常、国際18世紀学会執行委員会の際には、執行委員会メンバーのみが参加するシンポジウム（使用言語は原則として英語かフランス語）が開催され、それに1日充てられるのが通例であるが、今回はイエズス会に関するポルトガル18世紀学会のシンポジウムの期間に執行委員会が開催され、希望する執行委員は参加できる、という形であった。2日間にわたって19の発表と講演が行われたが、その大半がポルトガル語で行われたため、寺田・増田両名にとっては理解不可能であり、ここではフランス語または英語でなされたいくつかの発表・講演を簡単に紹介するにとどめる。

アルベルト・ポステリオリ氏（イタリア）は「モンテスキュー、イエズス会士とパラグアイにおける「共産主義」と題された発表の中で特に『法の精神』第4巻第6章におけるパラグアイ（実際には南米の大部分）でのイエズス会による教育に関する記述に焦点を当て、立法者の理論家という、モンテスキューのあまり論じられていない側面を指摘した。ディーダー・ドーソン氏（アメリカ）は「トゥルノンのコレージュにおけるイエズス会とオラトリオ会の教育法」と題された発表において、南仏のトゥルノンにあるコレージュの例を取り上げた。そこでの教育はイエズス会の追放を機にオラトリオ会によって引き継がれ、より近代的でより実践的な色彩の強い教育へと移っていったことなどが紹介された。ハンス＝ユルゲン・リュウゼブリック氏（ドイツ）は「他者の認識と人間論のディスクール アルザス人イエズス会士ヨハン・ヤコブ・ベガールの『カリフォルニアからの手紙』（1772）」という発表でカリフォルニアで宣教活動を行ったイエズス会士の手記を取り上げ、宣教の苦勞とそれによる孤立感や幻滅が語られている様を紹介した。ミハエラ・イリミア氏（ルーマニア）は「中国人に両目でものを見せること 17世紀末におけるイエズス会と正教会の宣教団」という題で宣教師たちの中国に対する視線の一端を紹介した。最後にジャン・モンド氏による「啓蒙の現代性」という講演でシンポジウムが締めくくられた。そこでモンド氏は伝達の自由、普遍主義、寛容の3点を啓蒙思想の主要な遺産と位置づけ、それらを主としてカントやレッシングの作品に即して論じ、啓蒙思想のもつ現代性を強調したのち、研究上の課題を提示した。

II. 執行委員会会合

議題1。モンド会長より挨拶とポルトガル18世紀学会への謝辞があり、昨年9月に急逝したシュローバ前会長に黙祷が捧げられた。

議題2として出席者の自己紹介が行われ、議題3では昨年8月3日の会合の議事録が原案通り、8月8日の会合の議事録が訂正の上承認された。

議題4。ハンス＝ユルゲン・リュウゼブリック氏から会計報告があり、次の5点からなっていた。

- (i) 2004年8月1日現在での国際18世紀学会の資産は56276ポンドにのぼり、これは冊子形式での国際学会名簿の廃止と拠出金の値上げの効果による。

- (ii) 国際18世紀学会の備蓄は現在では、毎年の若手研究者セミナー、4年ごとの大会、ウェブサイトと電子名簿という3つの主要な活動に充てられている。
- (iii) 国際学会への拠出金を滞納しているいくつかの国の学会に支払いの督促が行われることになった。
- (iv) 国際18世紀学会の印刷媒体の名簿について。冊子形式の名簿が廃止されたことに対して、出身国で不満が出たことが何人かの委員から報告され、規定方針通り冊子形式の名簿を廃止するかどうかの議論が行われた。現段階ではとりあえず、部数を減らして冊子形式の名簿を刊行し続ける場合の費用を推定すること、冊子形式の名簿を今後も希望するかどうか、経済的負担が増加しても名簿がほしいか、という点について各国で学会員の希望を調査することになった。(場合によっては各国がアンケートを行う。)
- (v) 事務局担当のジャネット・ゴッデン氏から、小切手以外の支払い方法を検討することが表明された。
- (vi) 資金調達委員会は今後も活動を続けることになった。

議題5は事務局報告であったが、前述の議題4と後述の議題9と重複するので省略。

議題6として国際学会の会則と内規に関する小委員会の報告があった。2007年のモンプリエ大会での総会で会則の改正を行うために、小委員会は来年の執行委員会会合の際に改正案を提案する予定であること、あわせて、執行委員会の権限で改正できる内規についても改正の提案がなされる予定であること、が報告された。また、会則の改正については特に第5条、第6条、第10条の記述を明確化することが重要であることが指摘された。

議題7として、ディーダー・ドーソン氏から書記長報告があり、国際学会執行部と各国学会との連絡の円滑化に特に努力していることが強調され、各国学会には、執行部の交代等の変動をなるべく迅速に報告することが求められた。また、2007年の役員選挙に向けて、選挙委員会が構成された。アンドリュー・カーペンター氏(アメリカ)を委員長として、ディミトリス・アポストロプロス(ギリシャ)、アルベルト・ポステリオリ、マリア・ヘレナ・カルヴァリオ・ドス・サントス(ポルトガル)の各氏からなり、来年の執行委員会会合までに候補者のリストを作成することになった。

議題8は2007年のモンプリエ大会についてで、クロード・ロリオル氏から準備の進捗状況等の報告があり、それにもとづいて活発な議論が行われた。まず、期間が2007年7月8日から15日までと変更されたことが報告されたのち、次の5点について討議が行われた。

- (i) 会場と宿泊。大会の会場は大学施設ではなく、モンプリエ市中心部にある会議場「ル・コロム Le Corum」(20の会議室をもつ複合施設)を中心とするという主催者の案が了承され、参加費ができるだけ低く抑えられるよう、主催者に配慮が求められることになった。宿泊については、大学の学生寮が利用できる見通しで、ホテルから学生寮まで多様な施設が用意できると表明された。
- (ii) テーマは「18世紀における科学と技術」とされていたが、科学技術に限定されたものではないことを明白にするために、もう一語付け加えられることになり、「18世紀における知と技術と文化 *Savoirs, techniques et cultures au 18e siècle / Knowledge, technologies and cultures in 18th century*」と定められた。
- (iii) 各国学会の役割。論題を提案する場合は広範でさまざまな領域の専門が参加できるものを提案することが求められる。少人数の聴衆しか集められないような、各国に限定されたテーマに関するラウンド・テーブルを提案することは勧められない。
- (iv) セッションの構成。参加者同士の対話を可能にするために、小規模なセッションや

短い発表も可能になるように配慮すること、若手研究者のための実践的なセッションを設ける必要性、プログラムが早期に入手できるようにすること、などの要望が出された。

- (v) 財源と助成。大会のために国際学会から5000ポンドの援助がなされることが確認された。ロサンゼルス大会で使用されなかった助成金5000ポンドを加えて、助成金の資金として最大15000ポンド用意する予定であること、助成金対象者の選定基準を見直す必要のあること、ロサンゼルス大会の時よりも、助成対象者を絞って金額を増額させる必要のあることなどが合意された。

最後に、2004年末までに、大会のテーマ等の概要が発表されることが定められた。

議題9として書記補佐のマーク・レッドベリー氏（イギリス）から特に国際18世紀学会のウェブサイトについて報告があった。

- (i) 同氏から、現在の書記補佐というポストの代わりに、国際連絡書記のポストを創設することが提案された。それに対して、書記補佐の負担を廃止する権限は執行委員会にはないことに注意が喚起されたが、今後このポストの職務をそのような方向に改革していくことで合意がなされた。
- (ii) 同氏はまた、国際学会内での連絡を改善する需要を強調したが、それは執行委員会内部と、執行委員会とその外部（一般会員、加盟国の学会）の間のことの両方が含まれる。そのためにも、ウェブサイトの充実が強く望まれる。
- (iii) サイト内に各国学会のページを作ることや、双方向機能を持たせることなどは、上記の改革が成功してからの課題となることが決定された。

（なお、レッドベリー氏からあらかじめ配布された報告書の中で、国際学会のサイトの改善のための詳細な提案が述べられているが、ここでは省略する。）

議題10では2005年と2006年の執行委員会会合について検討された。2005年の会合は9月21日から25日までドイツのハレで開催され、あわせて「啓蒙と宗教」と題されたシンポジウムが行われる。2006年の会合は8月16日から20日までフィンランドのヘルシンキで開催され、「18世紀における境界」というテーマでシンポジウムが行われる。この「境界」という語は単に地理的な意味だけではなく、哲学的、比喩的あるいは言語的な観点からとらえられたものも含まれる。

議題11若手研究者セミナーについて報告と議論が行われた。

- (i) ハンス＝ユルゲン・リュウゼブリック氏とフリッツ・ナーゲル氏（スイス）より、2004年9月にスイスのバーゼルで行われたセミナー（「言語的多元主義と文化的多元主義」）について報告があった。43人の応募者のうち、9カ国の15人が選ばれ、参加者たちはグループとしての活動を続けたいとの希望を表明した。それに関連して、国際学会からの資金援助の可能性について討議された。
- (ii) 2005年にチェコのブルノで開催される予定のセミナーに関して、日程やテーマなどの詳細がチェコ学会からまもなく発表される予定であることが報告された。
- (iii) 2006年のセミナーはマルク＝アンドレ・ベルニエ氏（カナダ）ハンス＝ユルゲン・リュウゼブリック氏によって企画され、「啓蒙と歴史」がテーマになる予定である。

議題12では国際学会の新たな活動が話題となった。2003年に創設された「新規活動検討委員会」の委員長として、アルベルト・ポスティリオラ氏から、セミナー以外の活動のための予備基金を創設するべきであるという提案がなされた。さらに、特に優れた研究のための賞を創設することや、アルジェリアやチュニジアなど、国ごとの学会が維持できなかった地域の研究者を支援するために、いくつかの国を包括する「南方18世紀学会」を創設することが提案された。これらの提案は次回会合で再び検討されることになった。

III. エクスカーション（9月25日）

会合の最終日はエクスカーションに充てられ、午前中はリスボン市立博物館の見学が行われた。そこでは特に18世紀半ばのリスボン大震災や宰相ポンバルによる再建の前後の時代に関する資料が多く、会員の関心を引いた。午後はリスボン市西部のベレン地区に移動し、ジェロニモス修道院とその周辺の見学と散策が行われた。

※この報告書は、国際学会書記補佐のレッドベリー氏から届いた議事録案（英仏2カ国語）の抄訳をもとに作成された。ご質問等は以下の会員まで。

以上

2004年12月11日

寺田元一

増田真

再発見されたバッハのカンタータ楽譜

礪山 雅

バッハの楽譜発見、というニュースが有力紙の一面に掲げられ、目に大きく飛び込んできたのは、今年の4月だった。それからしばらく、外国メディアを巻き込んだ取材ラッシュ、報道ラッシュが続いた。この過熱ぶりには、立ち会った私自身が驚いたというのが、正直なところである。これほど話題が沸騰したことの背景には、2つの要因があったと見ていいだろう。1つは、バッハのカンタータ楽譜という貴重な文化遺産が、ほかならぬ日本で発見されたということ。もう1つは、原智恵子（1914～2001）という人も知る名ピアニストが、その伝承に関与していたことである。ここでは発見の経緯を振り返り、若干の後日談をご紹介したいと思う。

発見されたのは、バッハが1728年に初演した結婚カンタータ《満ち足りたプライセの町 Vergnügte Pleißenstadt》BWV216のオリジナル・パート譜（すなわち初演用に用いられたパート譜）である。パート譜といっても完備したものではなく、ソプラノ用2葉、アルト用2葉の計4葉が、19世紀の所有者の手で、表紙を付けて綴じ込まれた形になっている。初対面の時、それは、原智恵子さんの所有だったショパンのピアノ協奏曲第2番の楽譜に、はさまれる形で保存されていた。300年近い歳月のへだたりを感じない、くっきりした手書きの楽譜が、そこにあった。

この楽譜は、新発見ではなく、かつて知られており、今回再発見されたものである。BWV216を伝承する唯一の源泉資料でありながら80年ほどの間姿をくらましていたのがこの楽譜で、BWVや『バッハ便覧Bach-Compendium』の資料記載欄には、紛失、あるいは所有者不明、と記されている。その欠損を補う今回の発見は、世界のバッハ研究にとって大きなものであった。とりあえず、BWV216はいかなる作品であり、どのような伝承ルートをたどったのか

に関する情報をまとめておこう。

くだんの作品は、ライプツィヒの商人とツィッタウの関税吏の娘の間に行われた婚礼の披露宴を彩るために、バッハが1728年に作曲したものである。台本は、《マタイ受難曲》の詩人として知られるピカンダーが書いた（印刷台本が現存）。それは、ツィッタウを流域にもつナイセ川（ソプラノ）とライプツィヒを流域にもつプライセ川（アルト）に対話させるといふ、なかなか洒落た趣向をもつ。すなわち、すばらしい女性を奪われたと嘆くナイセをプライセがなだめ、ともども新郎新婦に祝賀を捧げる、という趣向である。披露宴の場は聖トーマス教会の目と鼻の先にあるヘルハッフアーハウスというワイン酒場であったことが、当時の婚礼簿からわかっている。現存する披露宴用のカンタータ3曲のうちでも、機会がこのように特定されているのは、BWV216のみである。

パート譜は、バッハの自筆総譜から筆写される。そこからすると総譜の方が資料価値が高いように思えるが、パート譜は演奏者が実際に音を出すために用いたものであるから、総譜にない、具体的な情報を含んでいることが少なくない。このため、オリジナル・パート譜には、総譜に劣らぬ資料価値が認められている。それがバッハの手による校閲を経ていとなれば、なおさらのことである。BWV216の場合、バッハの自筆総譜は早い段階から失われ、器楽用のパート譜も失われた。息子のエマーヌエル・バッハはおそらくすでに声楽パートのみの形で、その楽譜をコレクションしていたと思われる。

エマーヌエル・バッハの死後、楽譜はペルヒャウへ、さらにフックスへと受け継がれたが、パート譜を製本して簡単な来歴を付けたのは、このアーロイス・フックスであった（1846年）。フックスは同時に、チェンバロ伴奏のパートを加えた筆写譜を作成している。この「フックス筆写譜」は現在、オーストリアのゲットヴァイク修道院図書館にある。フックスの死後、楽譜はピアニスト、タールベルクの手に渡り、1872年にロンドンの競売に出品されてから、姿を消した。したがってそれは、19世紀の後半を費やして刊行された旧全集版の楽譜には、収録されなかった。

1901年、楽譜は、ウィーンにおける競売に、突如姿をあらわした。入手した富豪、ローベルト・メンデルスゾーン（1857-1917、大作曲家の後裔）がそれをベルリンで行われたバッハ展に出品すると、知られざるカンタータ楽譜出現、という大センセーションが巻き起こったと伝えられる。騒がれた理由は、当時の人々が誰も、このパート譜をバッハの自筆だと信じて疑わなかったからである。今日ではそれが自筆でなく、クリスティアン・ゴットリープ・マイスナー（1707-60）という弟子の筆写であることが、ハンス＝ヨアヒム・シュルツェの研究によって明らかにされている（こうした鑑定が可能になったのは、ウィーンにおける競売用に、冒頭部分の写真が撮影されていたからである）。マイスナーの筆跡は、妻のアンナ・マクダレーナ以上に、バッハによく似ている。再発見された楽譜がこれほどのインパクトを世間に与えたのも、マイスナーの筆跡が、バッハと混同されるほど美しく、躍動的なものであったためであるに違いない。

1924年、BWV216の印刷譜が、ベルリンのリーナウ社から出版された。ヴェルナー・ヴォルフハイムが校訂したこの楽譜は、ゲオルク・シューマンという作曲家の手による器楽パートを付した実用版であった。しかしシューマンの復元はバッハの様式とはかけ離れたもので、今日ではもはや、使用に耐えない。

この頃を最後に、楽譜の消息は、ふたたびつかめなくなってしまう。石川康子さんの著作『原智恵子 伝説のピアニスト』（ベスト新書、2001年）には、次のようなくだりが出てくる。すなわち、1959年に原と結婚したスペインのチェリスト、ガスパール・カサド（1897-1966）は、バッハの自筆譜を所有して大切にし、毎朝練習前に拝むほどであったので、智恵子がそれを収める「厨子」を考案して喜ばれた、というのである。どうやらこれ

が、BWV216のパート譜であつたらしい。では、カサドはどこからこの楽譜を手に入れたのであろうか。上記メンデルスゾーンは自らもチェロを演奏する人物で、ベルリンにサロンを開き、夫人のピアニスト、ジュリエッタ・ゴルディジャーニ（1871-1955）がそのホステスを務めていた。カサドは早くからそのサロンに参加して夫人と親交を築き、ローベルトの死後は夫人とペアを組んで演奏旅行を行ったのみならず、フィレンツェに同居して、夫人の晩年を看取りさえした。こうした経緯のどこかで、BWV216の楽譜がカサドのコレクションに加わったことは、確実に思われる。原智恵子は1990年に帰国し、そのさい音楽コレクションを玉川大学に寄贈しているが、BWV216がいつごろ日本に持ち帰られたかは判然としない。

BWV216が旧全集に収録されなかった経緯についてはすでに述べた。しかしジックスと言うべきか、21世紀の半ばから出版されている新バッハ全集の出版のおりにも、BWV216の源泉資料がない、という事態が起こったのである。問題の巻は、1968年に出版されたI-40（『結婚カンタータ／種々の目的のための世俗カンタータ』）で、校訂者は、ヴェルナー・ノイマンであった。周知の通り、新バッハ全集は、オリジナル資料の徹底した調査と評価に基づく学術的に精度の高い楽譜出版を売り物としている。ところが、BWV216のためにノイマンが依拠できたのは、前記のフックス筆写譜とヴォルフハイム／シューマンの出版譜、そして若干の参考資料のみだったのである。彼が1970年に出版した校訂報告にもその困惑はありありと読み取れる。彼は、源泉資料を使えぬままに、周辺資料の考察を積み重ねるほかはなかった。そんな背景もあって、バッハ研究者たちは、失われた楽譜が再発見される日を願っていたわけである。

さて、楽譜が国立音楽大学の所蔵品になってからまず行われたのは、資料研究の世界的権威、小林義武・成城大学教授による筆跡鑑定であった。筆写譜の中に、バッハ自身による補筆・修正が見つかるのではないか、という期待がもたれたからである。私もその鑑定に同席させていただいたが、バッハの修正箇所はなし、という結論になった。平行して私は、パート譜の研究を進めた。マイスナーがどのような書き間違いを犯し、それに対してどのような修正を行ったか、出版歌詞と楽譜に記された歌詞の間にどのような異同があるか、恣意的に記入されているように見える歌詞を音符とどのように対応させるべきか、ノイマンの新全集版のテキストとオリジナル・パート譜はどのように異なっているか、そうなった理由はノイマンのどのような判断に起因するか、等々。一連の問題に関する私の考察と見解は、“Wiederaufgefundene Originalstimmen zur Hochzeitskantate ‘Vergnügte Pleißenstadt’ BWV216”と題する論文にまとめたので、ここでは省略させていただく（『バッハ年鑑Bach-Jahrbuch 2004』に収録。主要な情報は、ファクシミリ版の日本語解説にも盛り込む予定である）。いずれにせよ、さらなる研究と、発見資料に基づく正確な楽譜作りが必要とされる。そのために国立音楽大学は、創立80周年記念事業の一環として、BWV216の、3カ国語解説付きファクシミリ楽譜の出版を準備している。手稿譜の保存という責任を全うするために広く実物を閲覧していただけないのは心苦しいが、この出版によって、発見された楽譜の概要を、広く知っていただきたいと思っている。

このカンタータが断片である限りは、細部の修正も、さほど益のないものと思われよう。一方私のもとには、発見された楽譜を音として聞いてみたい、という要望が、当初から数多く寄せられていた。意外にもそれは、新しい復元楽譜を作成し、コンサートを開く、というアイデアとなって、実現への道を走り始めたのである。発見された楽譜を「演奏する」ためには、バッハの様式への深い理解に基づいて器楽パートを再構成するという、困難な作業が必要とされる。全7曲のうち2曲については、バッハがそれを他のカンタータに歌詞を変えて転用しているため、確実性の高い復元を行える。しかし他の5曲については通

奏低音のパートさえ残されておらず、すべてを事実上「作曲」しなくてはならない。歌声部の冒頭に「8」とあれば、8小節の前奏を、歌の旋律をヒントにしながら作ってゆかなくてはならないのである。この作業を、私はバッハ演奏家・バッハ学者として著名なジョシュア・リフキン氏一もともと、シュトックハウゼンの弟子として作曲を学んだ方一にお願いした。リフキン氏自身が指揮を執り、内外の演奏者たちをお呼びして行う結婚カンタータの夕べは、バッハの誕生日である3月21日の前後を目処に、準備されている。研究を続けているとどんなことに会おうかわからない、というのが、偽らざる実感である。

事務局より

名簿について

2005年は名簿作成の年度にあたります。前回の学会ニュースに同封いたしましたカードのデータに間違いがないかどうか、まだご確認くださってない方は、至急事務局にご連絡をお願いいたします。なお、間違いがない場合にも、その旨を事務局にご連絡ください。

なお、事務局へのご連絡は

・ e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp

・ fax: 03-5841-8958

・ 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
美学芸術学研究室

のいずれかをお願いいたします。

新名簿は2月頃発送の予定です。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくをお願いいたします。

新入会員 (2004年12月11日幹事会承認)

小嶋竜寿 テーマ ディドロの科学的思想と百科全書との関わりについて

菅原多喜夫 テーマ マブリの政治思想

横山義志 テーマ 18世紀フランスにおける演技理論

退会者

井上厚雄 阪本政仁 戸部松実

選挙について

2005年度は幹事会改選の年にあたりますので、3月に幹事選挙を行います。

現幹事会メンバー：安藤隆穂、安西信一(補充幹事：常任幹事・年報担当)、井田尚(補充幹事：常任幹事)、小田部胤久(常任幹事：会計担当)、川島慶子、木村三郎(補充幹事：常任幹事)、近藤和彦(補充幹事：常任幹事)、坂本達哉(常任幹事)、佐々木健一(代表幹事)、高橋博巳、寺田元一(国際幹事)、長尾伸一、堀田誠三、増田真(常任幹事)、渡辺浩(補充幹事：常任幹事)

会計監査：中島ひかる 森村敏己

日本18世紀学会ニュース 第47号 2004年12月発行
発行者 日本18世紀学会 代表者 佐々木 健一
事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室
e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp
fax: 03-5841-8958